

リーダーの選択における個人の「誘意性」の影響

— Bion理論に基づく実証的研究 —

山 縣 博 重

問題

本研究の目的はグループの Valency 構成とリーダーシップの好みとの関係を吟味することである。研究の理論的な背景としてはBionの集団心理に関する理論である。従って、本研究を記述する前にBionの基本的な概念について述べよう。

W.R.Bionのグループ理論

本研究は、W.R.Bionのグループ理論に基づいている。BionはTavistock clinicのグループにおける彼の経験をもとにとてもユニークなグループ理論の一つを発達させた。この理論の主要な点は、基底的理想 (Basic Assumption) の発想である。Bion (1968) によれば、グループが生まれるときはいつでも二つのかたちをとる。作動 (Work) グループとして機能を果たすか、基底的理想 (Basic Assumption) グループとして機能を果たす。前者のケースではグループメンバーは本当の基本的作業によって結ばれている。これに反して基底的理想グループの機能は、基礎をなす共通の基底的理想によって支配決定されている。そのメンバーたちは共通の無意識的理想を共にするかのようふるまい、その理想によってグループ行動と文化は影響を及ぼされる。Bionはこの理想を基底的理想と言い、

そして3つの違った基底的理想定について記述した。すなわちつがい・闘争／逃避・依存である。更にわかりやすくするために、Bionと違い闘争と逃避を別々に記述する。しかしながらこれ等は二つの独立した基底的理想定と考えるという意味ではない。

Bion (1968) によれば、Valencyは、基底的理想定に従って行動することにおいて個人がグループと協力する準備のできていることを意味する (p. 116)。その上Valencyは、自発的かつ本能的で、努力を必要とせず、個人的な行動の本来備わっている部分のように思える (De Board, 1978: p.42)。基底的理想定と同数のValencyが存在する。

以上の理論的な背景に基づいて、二つの研究を行った。

第一研究：

a. 仮説

被験者は、自分のValency (つがい、闘争、依存、逃避、作動) に相当するリーダーシップスタイル (つがい、闘争、依存、逃避、作動) を選ぶであろう。すなわち、つがいValencyを持つ被験者は、つがいリーダーシップを発揮するリーダーを好む。同様に自分の持つValencyと同じリーダーシップを発揮するリーダーを選ぶだろう。以上の仮説を検証するために以下の方法を用いた。

b. 方法

RGST Nara university version (Hafsi 1997) を用いて被験者 (社会心理学の講義に出席している学生134人) をValencyごとに分け、彼らの好むリーダーシップスタイルとValencyの関係を吟味した。すなわち、それぞれのValency (つがい、闘争、依存、逃避、作動) をもつ被験者に質問紙を配り、調査を行った。まず、態度面から見たリーダーシップの好み (つがい、闘争、依存、逃避、作動) を測った。

c. 結果

本仮説を検証するために、先ずそれぞれのValencyとそれぞれのリーダーシップの好みのタイプとの相関係数の分析を行った。その結果、それぞれのValencyとそれに相当するリーダーシップスタイルとの間に有意な相関があるという結果が見いだされた。すなわち、つがいのValencyと、つがいリーダーシップの間には、相関があった ($r=.48, p < .0001$)。また、闘争のValencyと、闘争リーダーシップの間にも相関があり ($r=.30, p < .0001$)、依存のValencyと、依存リーダーシップの間にも同様に相関があり ($r=.21, p < .05$)、逃避のValencyと、逃避リーダーシップの間 ($r=.76, p < .0001$)、また作動のValencyと、作動リーダーシップの間にも相関があった ($r=.30, p < .001$)。

次に、Valencyとリーダーシップ好みとの関係を具体的に吟味するために、一元配置分散分析 (ANOVA) を行なった。その結果は、次の通りである。すなわち、つがいのValencyを持った被験者は、他のValency (闘争、逃避、依存、作動) をもった被験者よりも、つがいを反映するリーダーシップを発揮するリーダーを好む ($F [4, 134] = 44.10, p < .0001$)。闘争のValencyを持った被験者は、他のValencyを持った被験者よりも、闘争を反映するリーダーシップを好む ($F [4, 134] = 15.30, p < .0001$)。依存のValencyを持った被験者は、他のValencyを持った被験者よりも、依存を反映するリーダーシップを好む ($F [4, 134] = 71.90, p < .0001$)。逃避のValencyを持った被験者は、他のValencyを持った被験者よりも、逃避を反映するリーダーシップを好む ($F [4, 134] = 24.02, p < .0001$)。作動のValencyを持った被験者は、他のValencyを持った被験者よりも、作動を反映するリーダーシップを好む ($F [4, 134] = 35.26, p < .0001$)。

d. 考察

本研究の結果によって、Valencyとリーダーシップスタイルの好みとの間に相関があるという仮説は、検証された。すなわち、個々人は、それぞれのValencyのタイプ（つがい、闘争、逃避、依存）に相当するリーダーシップスタイルを好むということが分かった。しかしながら、本研究に参加した被験者は、自分のValencyに合うリーダーシップを選択しているが、実際にそのリーダーシップを体験していない。すなわち、被験者は、そのリーダーシップの下で振る舞ったり、活動したりしていない。換言すれば、第一研究の結果は、態度のレベルからみた、被験者のリーダーシップの好みに過ぎないと言える。従って、行動レベルにおける被験者のリーダーシップ好みも研究しなければならない。よって、以下に述べる実験的研究（第二研究）を行った。

第二研究：

a. 仮説

被験者は、自分のValency（つがい、闘争、依存、逃避、作動）に相当するリーダーシップスタイル（つがい、闘争、依存、逃避、作動）を、行動面でも選ぶであろう。すなわち、つがいValencyを持つ被験者は、つがいリーダーシップを発揮するリーダーを行動面で好む。同様に自分の持つValencyと同じリーダーシップを発揮するリーダーを選ぶ。

b. 方法

RGST Nara Universty version (Hafsi 1997) を用いて被験者（社会心理学の講義に出席している学生218人）で実験を行い、行動面から見たリーダーシップの好み（つがい、闘争、依存、逃避、作動）を測る。

c. 結果

本研究の目的は、第一研究とは異なり、態度のレベルでなく、行動のレベルでの被験者のリーダーシップの好みと個人のValencyの関係を吟味することである。すなわち、RGST Nara University version (Hafsi, 1997) の結果に基づいて被験者をValency (つがい、闘争、依存、逃避、作動) によって分類し、リーダーシップスタイル (つがい、闘争、依存、逃避、作動) の好みから見て、被験者を比較した。

前述したように、第二研究の仮説は、第一研究と同様に、被験者は自分のValencyに相当するリーダーシップスタイル体験すれば、それを選ぶであろう、というものである。はじめに、リーダーシップの認知分析を、一元配置分散分析 (ANOVA) を用いて行った。その結果、つがいValencyをもった被験者は、他のValency (闘争、依存、逃避、作動) をもった被験者よりも、つがいを反映するリーダーシップを持つリーダーをリーダーと認知する ($F [4, 49] = 22.20 \quad p < .0001$)。闘争Valencyをもった被験者は、他のValencyをもった被験者よりも、闘争を反映するリーダーシップを持つリーダーをリーダーと認知する ($F [4, 49] = 20.65 \quad p < .0001$)。依存Valencyをもった被験者は、他のValencyをもった被験者よりも、依存を反映するリーダーシップを持つリーダーをリーダーと認知する ($F [4, 49] = 8.43 \quad p < .0001$)。逃避Valencyをもった被験者は、他のValencyをもった被験者よりも、逃避を反映するリーダーシップを持つリーダーをリーダーと認知する ($F [4, 49] = 42.83 \quad p < .0001$)。作動Valencyをもった被験者は、他のValencyをもった被験者よりも、作動を反映するリーダーシップを持つリーダーを持つリーダーと認知する ($F [4, 49] = 17.76 \quad p < .0001$)。

次に、それぞれのValencyと、リーダーシップの好みを聞く質問の分析は、一元配置分散分析 (ANOVA) を用いて行った。その結果、つがいValencyをもった被験者は、他のValency (闘争、依存、逃避、作動) を

もった被験者よりも、つがいを反映するリーダーシップを発揮するリーダーを好む ($F [4, 9] = 4.39 \quad p < .06$)。闘争Valencyをもった被験者は、他のValencyをもった被験者よりも、闘争を反映するリーダーシップを発揮するリーダーを好む ($F [4, 9] = 29.78 \quad p < .001$)。依存Valencyをもった被験者は、他のValencyをもった被験者よりも、依存を反映するリーダーシップを発揮するリーダーを好む ($F [4, 9] = 51.64 \quad p < .001$)。逃避Valencyをもった被験者は、他のValencyをもった被験者よりも、逃避を反映するリーダーシップを発揮するリーダーを好む ($F [4, 9] = 16.91 \quad p < .01$)。作動Valencyをもった被験者は、他のValencyをもった被験者よりも、作動を反映するリーダーシップを発揮するリーダーを好む ($F [4, 9] = 19.88 \quad p < .01$)。

d. 考察

前述したように、第二研究の目的はValencyとリーダーシップスタイルとの関係を吟味することである。その研究の結果によれば、Valencyとリーダーシップスタイルの好みとの間に相関があるという仮説は検証された。すなわち、個々人はそれぞれのValencyのタイプ（つがい、闘争、逃避、依存、作動）に相当するリーダーシップスタイル（つがい、闘争、依存、逃避、作動）を好むということが分かった。

参考文献

- Bion, W.R. 1968. *Experiences in groups*. New York: Basic Books.
- De Board, R. 1978. *The Psychoanalysis of organizations*. London: Tavistock Publications.
- Hafsi, M. 1997. Valency and its measurement: validating a japanese version of the Reaction to Group Situation Test (RGST): *Psychologia*, 1997, 40, 152-162